



1862年ロンドン万国博覧会に関する一考察 : イギリス「最後の」万国博覧会

重富, 公生

(Citation)

国民経済雑誌, 225(2):1-17

(Issue Date)

2022-02-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0042590>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042590>



国民経済雑誌

1862年ロンドン万国博覧会に関する一考察

——イギリス「最後の」万国博覧会——

重 富 公 生

国民経済雑誌 第225巻 第2号 抜刷

2022年2月

神戸大学経済経営学会

1862年ロンドン万国博覧会に関する一考察

——イギリス「最後の」万国博覧会——

重 富 公 生^a

十年前に刊行した拙著では1851年のロンドン万国博覧会を「産業のパクス・ブリタニカ」を象徴する催しとして取り上げたが、その11年後に開催された1862年ロンドン万博は、研究対象として取り上げられることはほとんどない。本稿は、こんにちにいたるまで実質的にイギリス最後の万博となっているこの博覧会について、二つの万国博の間隔と同じ時間を前著から隔てていることを半ば意識して叙述した、試論的なエッセイである。まずこの万博が当時から現代までどうとらえられてきたかを概観したあと、博覧会の時代背景や立ち上げの作業の概要を説明し、主要な展示品を中心にその成果や実績を論じる。この万博は、たしかにそれ自体としては、1851年の大成功の催しを理念的・内容的に継承しさらに発展させただけでなく、この間十年の内外の諸情勢を反映し、また技術的進歩を如実に反映する画期的な試みでもあった。

キーワード 万国博覧会, 技術革新, 工業部門分類, 産業衰退

1 はじめに

2020年に開会が予定されていたアラブ首長国連邦でのドバイ万博（「2020年ドバイ国際博覧会」）は当初の予定が一年延期され、またあらかじめ年をまたぐ会期が設定されていたため、本誌の発行時には引き続き会期中である。2025年の大阪・関西万博は現時点では会期変更の動きはなく、いずれ万博史回顧の機運もまた強まっていくことになる。いっぽう2020年には国際日本文化研究センター・京都大学を拠点に研究活動を続けてきた「万国博覧会と人間の歴史」研究会が、現時点での集大成ともいえる『万博学』を刊行した。編者の佐野真由子による巻頭論文は、注目される機会の少ない1862年ロンドン万国博覧会（The International Exhibition of 1862, London, 以下「1862年博」と略記³⁾）を対象のひとつとしている。

本稿は1862年にロンドンで開催されたこの万国博覧会を取り上げようとするものである。ヴィクトリア時代の繁栄を象徴する催しであった1851年のロンドン万博（The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations, 以下「1851年博」と略記）の11年後に、同じロ

a 神戸大学大学院経済学研究科, shigetomi@econ.kobe-u.ac.jp

لندنを会場とする第二回の万博がイギリスで開催された。この第二回の万博は、会場の規模や展示品数・出品者数・参加国数、そして入場者数で第一回の実績を上回っていたにもかかわらず、こんにち研究対象として取り上げられることはほとんどなく（多くの専門的著作が早くから刊行され続けている1851年博とは対照的に、管見のかぎりでは単行の研究書さえない）、歴史や経済史のテキストの類いでもあまり重視されていない（ただし、駐日大使オールコックのコレクションとはいえ日本からの展示品コーナーが初めて設けられたこと、また福沢諭吉を含む遣欧使節団が日本人として初めて万博を視察していることもあり、そのような視角から描かれる機会はある⁴⁾）。そして後世の評価にとどまらず、すでに閉会直後から失敗だったという声が寄せられていた。

副題でイギリス「最後の」万国博覧会と表記した。「万国博覧会」と公式に認定されるのは、1931年にパリで博覧会国際事務局（Bureau International des Expositions）が設立されてからのことなので、それ以前については、明確な基準がなく歴史の実績による判断となる。しかし後述のように、1862年博以降もイギリスで何度も博覧会は開催されているが、それらは本来の意味での「万国博覧会」としての催しとは言いがたい。ここでは、なぜこの博覧会が実質的に最後の万博となったのか、はたして後世に「忘れ去られるべき」催しだったのかといったことを念頭に置きながら、あらためてその経緯と概要、そしてその意義を考察してみたい。

2 1862年博はどうとらえられてきたか

この博覧会は、当然のことながら、開催前には「失敗」の可能性が想定されていた催しではなかった。というより、そのような危機感とは無縁に、主催者は順調に資金集めを進めることができた⁵⁾。次節で述べるように、1851年博のあと、アメリカとフランスで万博が開催され、イギリス国内でも一定規模の内国博が複数開催され、開催の直前には「今まさに万博の時代⁶⁾」という機運さえあった。とくに1851年博の大成功をふまえ、「文明の進歩が地球を覆おうとしている」時代と認識されていたのである⁷⁾。大方の関係者にとって、成功はほぼお約束のものと確信されていたに違いない。

のみならず、失敗であったかどうかはともかく、1851年博ほど輝かしい成果と印象を生まなかった理由はいろいろあり、そのなかには直接催し自体の内容とは無関係なこともあった。1851年博の実質的な主導者を務め、その成功により俄かに国民的人気が高まっていたアルバート公（女王の夫君）は第二回の開催にも積極的であったが、開催の前年にチフスで急逝し、イギリス全体にその喪に服する雰囲気漂っていたこと（開会式での女王の臨席もなかった）。会期は夏を中心とする半年間と設定されたが、この年の夏はとりわけ雨が多い湿った冷夏だったこと。アメリカ合衆国の南北戦争のため綿花の輸入が大幅に減少し、マンチェ

スターを中心とする綿工業部門はいわゆる綿花飢饉に直面し、業界全体が沈滞気味であったこと。たしかに入場者数は前回はわずかに上回っていたが、開催経費もかさみ、おおかたの関係者の期待に反して収支の黒字は計上されなかったこと。そしてなによりも大成功の催しとたたえられた水晶宮での第一回の影に隠れてしまったこと。その鮮明な記憶は「例外的なイベント」として長く保持されており、1862年博の主催者たちは、展示品を国ではなくクラスに分類する方針をよりいっそう徹底しようとし、また美術部門も重視することによって、「工業と芸術の進歩」を誇示しようとしたが、ホッフェンバーグの表現を借りれば、水晶宮の神秘的なまでの輝きの前にはその光が失われてしまったのである。⁸⁾

1862年博の会場建物は、当初から批判の対象であった。会場はサウス・ケンジントンの一角の、当時王立園芸協会(Royal Horticultural Society, アルバート公が死去まで会長を務めていた)の大庭園の南側の土地で、げんざい自然史博物館(Museum of Natural History)や科学博物館(Science Museum)が建てられている場所にあたる。会場建物は、1851年博の建物より広く収納容積も大きいことが条件であった(展示品数も増え機械等も大型化することが見込まれる)。また1851年博の水晶宮は鉄とガラスでつくられた巨大なプレハブの建物であったのに対し、大会のあとも定期的な利用が予定されていたので、永続的な建物とする必要があった。もちろん予算上の制約もあった。前回と同じく建築プランのコンペが行われたが、これらの条件を満たすものとして、1855年のパリ万博のイギリス部門の設計をおこなった実績のあるフォーク(Captain Fowke、軍の大佐を務めた経歴があった)の案が採用されたが、選考にあたってはフォークと後述のコールの個人的な癒着や不明朗な経緯が問題視されることもあった。

建物は南側の Cromwell Road に面して正面を配するコの字型の巨大な二階建ての建物で、外観的には両脇に位置する巨大なドーム(バチカンのサンピエトロ寺院、セントポール寺院の次に高いという謳い文句)が特徴的であった。イギリスの輝かしい繁栄を象徴するような明るく華やかな水晶宮と比べると、いかにも地味な存在で(予算の都合で外見上の装飾の一部を閉会後に施すことも想定されていた)、一般にもその評判はけっして芳しくなかった。管見のかぎりでは例外は Cassell 社が出版した定期刊行の家庭向け万博新聞で、この建物について、クリスタルパレスのような開放的な明るさには欠けているが、堅牢で広大な造りであり、イギリス人の性格に合っている。どんな辛口の批評家もフォークの設計の美点は否定できない、という的外れの褒めようであった。⁹⁾50年代のダブリンとニューヨークの博覧会では、その成功にあやかり水晶宮風の設計が採用されていた。もちろん、今回貴重な絵画や大型の機械類を展示するにあたり、採光等の理由で、ガラス張りの建物は不適切という理由があった。結果として建物自体は水晶宮と違い伝統的様式に沿ったものとなったが、建築の専門家たちも大方は醜悪とみなした。確かに建物の規模は大きかったが、すでに大きさのみで

驚きを与えられた時代ではなくなっており、創造的試みの欠如を補う要素が何もなかったの¹⁰⁾である。

また労働者にとってどれほど「啓蒙的」効果を及ぼす催しだったかについても、疑問符がつけられることもあった。すでに1851年博についても、展示品の分類法や展示方針にたいして、建前のように「モノが実際につくられる」過程を具体的に示すというよりも消費に力点¹¹⁾を置くものであり、「労働の尊厳」を標榜する催しにはなっていない、という批判があった。ただ夥しい数の労働者階層が参観したことから、展示品の分類方針も含め、平日入場料を格安の1シリングとする（シリングデー）ことなどは踏襲された。出品者の名義を製作者（製造者）にかぎらず、それを取り扱う商人も含めた広い意味での出品者とする方針もそのひとつであるが、これにたいしても、展示品の生みの親である発明者や貧しい労働者たちを軽視するものであり、真の「産業の殿堂」とはなっていないと指摘された。シリングデーの設定についても、土曜（日曜は定休）には5シリングを課しているため、土曜しか参観できない多くの労働者のことをないがしろにしている、市民や労働者にたいしては旅費や入場料に関していっその配慮をおこなうべきという声があった。そして、このような大掛かりな催しにつきものの、税金の巨大な無駄遣いという批判は常に存在したし、とくに赤字が計上されなかったことが明らかになると、主催者や関係者は汚職や窃盗に類する行為によって、国を犠牲にして私腹を肥やしたとさえ非難された。¹²⁾

3 開催までの経緯と大会の概要

3.1 1851年博から1862年博までの間

この二つの万博の時間的隔たりはわずかに十年余りであるが、しかし内外で変化の大きな時期でもあった。国内鉄道網のマイル数は延長を続け、海底電信ケーブルがネットワークを広げ、またインドが国王の直轄統治下に置かれた。またクリミア戦争、イタリア独立戦争、そしてアメリカでの南北戦争の勃発といった戦乱の時代でもあった。

内外の主要な政治経済に関わる動向を年表風にあげておこう。

- 1851 ドーヴァー・カレー間に海底電線敷設、合同機械工組合発足
- 1852 仏ナポレオン3世による第二帝政開始
- 1853 クリミア戦争勃発、工場法の改定、プロイセン・オーストリア通商条約
- 1854 クリミア半島野戦病院の改革
- 1855 アバディーン内閣総辞職、パーマストン内閣成立
- 1856 イギリス・イラン戦争
- 1857 仏露通称条約、独通貨同盟成立
- 1858 インド統治改善法（東インド会社解散）
- 1859 仏奥戦争勃発、イタリア独立戦争勃発

1860 英仏通商条約

1861 アルバート公没, 米南北戦争勃発

1862 独仏通商条約

これらの出来事はその多くが何らかのかたちで1862年博の内容に影響をあたえている。アバディーン内閣は、1862年博をまたぐほぼ十年の長期政権となった。この間、1851年博の大成功に刺激されて、内外で多くの博覧会が開催された時期でもあった。以下に内外の主要な催しをやはり年表風にあげておこう。

1852 Cork Exhibition (アイルランド)

1853 New York Exhibition 民間ベースで運営、水晶宮に似せた建物で、「二匹目の泥鰌」をねらったが、会場建物竣工の遅れによる開会の遅延もあり、商業的には失敗(赤字)であった。アメリカはこのあと、独立百周年を記念するフィラデルフィア万博までの四半世紀、万博を開催していない。なおイギリスからはのちに述べるディルクらが視察し報告書を作成している。

1853 Dublin Exhibition 入場者数は好調で、単純に都市人口あたりで比較すれば1851年博を上回り、美術部門も設けられた。

1854 Munich Exhibition 国際博ではないが、バイエルン王国だけでなく全ドイツが参加した。

1855 French International Exhibition 5月1日～12月1日 フランス初の国際博覧会として有名な催し。出品者数は1851年博よりも少なかったが、それまでの仏の内国博からは大幅増、イギリスからの出品者や入場者も多かった。

1857 Manchester Fine Art Exhibition 全国から古今の名画が展示され、いわば1862年博の美術部門展示の先駆けとなる。マンチェスターの新興実業家の間で広がっていた現代美術品収集ブームが背景にあった。

1861 Italian National Exhibition (Florence)

3.2 会の立ち上げ

1862年博がいつごろから発案されたのかを正確にたどることはむずかしい。1851年博の大成功はこの種の催しの開催を刺激し、それにこたえる形で上述のような内外の各種博覧会が開かれたのであるが、一方で前回万博に匹敵しそれを上回るような規模の大会を開催したいという機運は1850年代に次第にたかまってきた。次期大会の開催にとくに熱心だったのは、1851年博実施にあたって積極的に関与した工芸振興協会(the Society for the Encouragement of Arts, Manufactures and Commerce, 略称 the Society of Arts)であった。前回から引き続きアルバート公が同協会の会長をつとめていたが、同協会評議会委員のヘンリー・コール(Henry Cole, 両者とも前回万博で主役級の役割を果たした)は、1855年の第一回パリ万博を視察し報告書を議会に提出し、イギリスでも第一回の十年後の1861年に第二回万博を開催することをはっきりと構想するにいたった。同じ評議員のディルク(C. W. Dilke)の賛同も得て1858年4月に来たるべき万博の趣旨を説明したレポートを作成し、同時に会長のアル

パート公にたいして、1851年万博王立委員会（現在なお存続している）に資金援助を要請するように依頼した。このあたりが1862年博の濫觴の時期となろう。以下、主として1862年博¹³⁾の公式カタログの叙述に依拠しながら、立ち上げの過程を簡単にみていきたい。

コールをはじめとする協会の発案者たちは、開催理由として1850年代のイギリス内外の諸面での大きな変化、たとえば人口の急増、鉄道ネットワークの大幅な拡大や郵便・電信網などの情報通信手段の拡張、欧米での関税の撤廃や軽減、そして科学技術のますますの進展をあげている。そして1861年だけでなく十年ごとに定期的に万博を開催することも視野に入れていた。ただし、1859年にヨーロッパ大陸で仏墺戦争、イタリア独立戦争が勃発し、戦争の直接の悪影響を避けるため開催は一年延期されることになった。

開催にあたっての資金は前回と同じく、民間から募られた。すなわち、協会はその主要なメンバーを受取人（のち trustees となる）に指名し、各界の著名人や企業家・資産家に働きかけて保証金の名目で資金を拠出するよう働きかけた。拠出者は、もし大会が赤字を計上した時は穴埋めの支払いを行なう必要があり、逆に剰余金が出たときには配当としてその一部を受取れるという契約である。おそらく大きな黒字を計上した前回の記憶が鮮明だったためか、この方法はおおかた順調に推移し、1860年には合計額が30万ポンドを超えていた。

しかし協会としては、実際の主催者としては1851年博を主宰した王立委員会がふさわしいと考えていた。その理由としては前回大会を成功に導いた実績とノウハウがあり、また莫大な剰余金を獲得した団体としての責務でもあるからである。主催主体をめぐっては両者の間で紆余曲折の経緯があったが、王立委員会は、trustees に信託する形で集められた資金を委員会が使うわけにはいかないという表向きの理由で主催者となることを拒んだ。その一方で、すでに多額の資金が集められていることを一種の担保とみて、協会の要請にこたえて王立委員会はサウス・ケンジントンの土地（前回の剰余金で王立委員会が購入していた）の一角を大会会場として無償で協会に貸与することになったのである。

1861年2月14日に1862年博の開催を認める勅許状に玉璽が印され、開会が公式に許可された。それによれば、trustees に任命されていた協会の5人のメンバーが「1862年万博実行委員」として、大会の主催者を務めることとされた。委員は以下の5名である。もともとの発案者であったコールは委員には名を連ねず今回は相談役のような立場で参画することになったが、会場建物の設計者の選定などでは中心的な役割を演じている。

Earl Granville

Charles Wentworth Dilke

Thomas Baring

Duke of Buckingham

Thomas Fairbairn

うち、前三者は1851年博の王立委員会のメンバーでもあり、また残りの二者もののちに王立委員会のメンバーとなる。グランヴィル伯爵は、のちに外務大臣の地位に就く。その他、実行委員会が統括する各種委員会のチーフや、褒賞の審査委員も1851年博に関わった者も多く、たしかに王立委員会は1862年博の主催者とはならなかったが、人的つながりで言えば、この二つの万博は兄弟関係にあったといえよう。ただしラックハーストも指摘するように、王立委員会メンバーに比べるといわば質量ともに大きく見劣りする布陣であったことは否めず、すでに準備段階から委員会の関心は大会そのものの運営よりも（成功自体はほぼ確信されていた）、余剰金の使途に向かっていた。その意味では1851年博の成功の犠牲者であったかもしれない¹⁴⁾。もちろん、アルバート公の在・不在は二つの大会の大きな違いであった。

3.3 大会の概要について

1861年の3月上旬に実行委員会はロンドン市内のテムズ川沿いのストランド通り（Strand）にオフィスを構え会合を重ね、1862年博の運営方針の骨子を決定した。以下はその決定内容からの抜粋を中心にあげたものである。¹⁵⁾ 列挙にあたり、1851年博と明確に異なる方針については◎を付した。

- ・1862年5月1日に開会式を開催し、会期は10月18日までとする。

（ただし、思わしくない収入を増やすために、のちに閉会式は11月1日にまで延長され、さらにそのあと二週間は会場で展示品の販売が行なわれた。）

◎産業関係の展示品は1850年以降に製造されたものに限定し、その選別は実行委員会が行なう。

（1862年博が前回の催しからどの程度進化したかを趣旨とすることからこのように規定されたが、実際には実質的に前回と同じ展示品も少なくない。理由は不明だが、おそらく新規の展示品だけで会場を埋めるのは困難であったことと推測される。）

- ・出品者の資格を明示する。

（製造業者としてか、商人か、コレクターか、など、これは1851年と同じ。1851年にも製品の出品者は製造業者に限るべきだという要望が出されたが、これは却下された。）

◎褒賞については、優秀な出品者に賞金ではなくメダルを賦与する。メダルは、等級をつけずに一種類とする。出品者はひとつのクラスのなかで複数のメダルを得ることはできない。各クラスには外国人の審査員を加える。もし出品者自身が審査員の場合は該当するクラスの

メダルを得ることはできない。

(1851年には三種類のメダルが与えられた。これは必ずしも等級分けではなく、それぞれが異なったメリットに対する褒賞と公言されていた。しかし、3つのメダルの優劣は否が応でも意識せざるを得ず、そのことが出品者に強い反感を引き起こすことになった。おそらく今回はその経緯をふまえて一種類のみの設定となったと思われる。しかし同時代人のマレットは、25000人の出品者のうち7000人にメダルが与えられた(3.5人に1人!)ことは、いわばバラマキの行為であり、展示品のメリットが厳正に審査されたとは程遠い事態であったと批判している。¹⁶⁾)

◎美術品部門以外については、展示品の価格表示を認める。

(1851年博でも、製造業者を中心に会場での価格表示の希望があったが、王立委員会は、万博開催の趣旨を踏まえ、価格表示により万博会場があたかも巨大な商品市(バザール)に化してしまうことを避けるため、価格表示を認めなかった。)

◎会場内に出品者の判断により展示品説明役の人員を配置することはできるが、観客と商談をさせてはならない。

(これも1851年には認められなかったことであるが、その時にもすでにこのような人員を望む声は寄せられていた。)

・入場券は会期中いつでも入場可能であり開会式にも出席できる seasonal ticket と当日券とし、当日券は時期および曜日により1ポンドから1シリングまで分けられる。また北の王立園芸協会の庭園の側にも入り口を設け、庭園に同時に入場できる joint ticket も販売する。

4 成果と実績：1851年博からの展望

4.1 展示品の分類について

万国博覧会の展示は、展示品の種類による特定の分類が行なわれてきた。19世紀にフランスで何度も開催されてきた万博が“Exposition Universelle”, つまり「万物博覧会」と称されており、「森羅万象」の展示物の博覧会である以上、それらをおある規則によって分類し、体系的展示を行なうのは当然のことであった。¹⁷⁾ 1931年に前述の博覧会国際事務局(BIE)が設立されたあとはBIEが分類のグランドデザインを提示し、各大会はそれに準拠することになった。展示品の部門・クラス分類はおおむね第二次世界大戦後初のブリュッセル万博(1958年)まで踏襲されたが、その後万博のテーマが特定の内容に絞られるにしたがって、体系的分類方法による展示は行なわれなくなった。

1862年博の分類法は、ほぼ1851年博の実績を踏襲したものとなっている。始めにあげた『万博学』の佐野論文は、1862年博の計画者・主催者の意図として、国単位の展示を行わないこと、すなわちたんに多数の国々を参加させることよりも、分類による展示を前面に打ち出すことによって、「世界を自らの体系によって把握しなおそう」という試みであったと指摘している¹⁸⁾。ただし、1851年博でも、当初は外国出品も含めてすべての展示品について分類を基準に配置するという方針は掲げられていたが、外国からの情報の欠如や建物の形状自体に伴う事情等で、分類展示は国内出品のみとなった事情があった¹⁹⁾。

〔表1〕に1851年博、〔表2〕に1862年博について、それぞれ部門・クラス分類と各クラスの出品者数を記した。1851年博では全体を大きく4つの部門(section)に分け、第一部門以下、原材料、機械類、工業製品、美術品とし、さらに全体を30のクラスに細分した。大筋として1862年博もこれに添った分類であるが、多少の変化が見られる。クラスの数が増えているが、その理由として、前回は“philosophical instrument”としてクラス10の1クラスとされていた展示品が、ここではクラス13から17に分けられていることがあげられる。この十年でこれらのクラスに分類される展示品の種類が増え、また品質も向上していった事実を物語っていると言えよう。それと前回は設定されていなかったクラス29の教育にかかわる展示、さらにクラス30の1クラスのみだった美術部門が一つの部門として独立し、内容を大幅に充実させているからである。大成功とされた前回の大会でも不評を買ったのは美術部門の貧弱さであった(内容も工業技術と何らかの形でかかわる彫像美術のみで、絵画は一切出品されなかった)。1855年パリ万博の美術部門が大好評だったことを見習って、イギリスも即座にマンチェスター美術博を開催し、それを引き継ぐ形で1862年博の美術部門も大いに力が入れることになった。残念なことに展示目録は編集担当者の醜聞により発行が中止され、こんにち包括的な情報が残っていない。なお、出品者数を1851年博と比較すると、全体としてとくに大きく増えているわけではない。むしろ、クラスが細分化されたり、あらたなクラスが加えられたため、クラス平均はやや減少している(ただし美術部門の正確な出品数がわからないので、正確には判じがたい)。

会場内の展示品の配置も、ほぼ前例に添ったものであった。すなわち、単一の大規模な建物のなかに、国別・クラス別に分けて配置するという方法である。このあとの1867年のパリ万博からは、一つの建物を中心としながらも、複数の開催国企業館や各国の別館が加わってゆき、しだいに現行のパヴィリオン型に変わっていったが、1862年ロンドン万博までは単一館形式が主流だった。建物内の展示スペースは、これも前回同様大きく二つに分けられ、東半分にイギリスおよびその植民地からの展示品、西に諸外国からの展示品が配列された。

展示品の配置については、当初は国別ではなくクラス別の配置が目論まれていた。つまり、イギリスであろうと海外であろうと原産地を問わず、厳密にクラス分類の体系に添った展示

表1 1851年博各クラス展示品分類・出品者数

クラス	内容	出品者数
原材料部門		
1	鉱物諸原料	474
2	化学・薬用原料全般	134
3	食材	136
4	工業加工用・装飾用の植物性・動物性素材	119
機械部門		
5	直接利用の機械類（諸車両、鉄道・水運用機械）	400
6	各種用途機械・道具類（繊維加工、金属加工、食品加工等）	241
7	土木工学・設計建築諸装置	189
8	造船および軍事技術（武器・装甲・防具類）	340
9	農業・園芸用器具・機械類	258
10	物理学・気学・天文学機器類、楽器、計時器具、外科医療器具	563
工業製品部門		
11	綿製品類	64
12	毛織物類（紡毛および梳毛織物）	337
13	絹製品およびビロード	80
14	亜麻・麻製品類	98
15	種々の交織製品（ショール含み、梳毛織物除く）	*
16	皮革製品（馬具一式含む）、毛皮・羽毛・毛髪製品	280
17	紙類、文具、印刷具、装丁本	176
18	捺染・染色繊維類	97
19	綴織（絨毯含む）、レース、刺繍、手芸・工芸品	292
20	個人・家庭用各種装身具（帽子、靴下、手袋、下着等）	238
21	刃物類	43
22	鉄製品および金物類全般	628
23	貴金属加工品および模造品、宝石類、趣向・奢侈品	122
24	ガラス製品	93
25	陶磁器	60
26	家具および室内装飾（張り壁紙、張り子、漆器含む）	346
27	建築・装飾用の鉱物性物質加工品	127
28	動物性・植物性素材の加工物（これまでの分類に含まれないもの）	139
29	種々の工業製品、小間物	283
美術部門		
30	彫像、模型、塑像	508

* XV 部門の出品者数は XII に合算されている。

（出所）*Official Catalogue (1851)*, vol. I, pp. 89-106

表2 1862年博各クラス展示品分類・出品者数

クラス	内容	出品者数
原材料部門		
1	鉱山・採石・冶金および鉱物原料	433
2	化学・薬品原料全般	212
3	食材	179
4	工業加工用の動物性・植物性原料	285
機械部門		
5	鉄道用機材（機関および車両含む）	86
6	軌道交通以外の車両	116
7	製造業機材	265
8	機械類全般	255
9	農業・園芸用機械・器具類	136
10	土木工学・設計建築諸装置	221
11	軍需品（武器・軍服・大砲・小火器）	151
12	軍艦・海事諸般	168
13	物理学・気学・天文学機器類	163
14	写真機および写真	158
15	計時器具	113
16	楽器類	94
17	外科医療器具	130
工業製品部門		
18	綿製品	60
19	亜麻・麻製品	82
20	絹製品・ビロード	64
21	紡毛・梳毛製品および交織り製品全般	263
22	絨毯	43
23	染色された糸・布地・フェルト類	52
24	綴れ織り・刺繍・レース	85
25	皮革・毛皮・羽毛・毛髪製品	88
26	なめし皮（馬具含む）	155
27	装身具	244
28	紙類・文具・印刷具・装丁本	249
29	教材・学用品	257
30	家具・室内装飾（張壁紙・張り子含む）	290
31	鉄製品・金物類全般	425
32	鋼鉄・刃物類	138
33	貴金属加工品・模造品および宝石類	90
34	ガラス製品	90
35	陶磁器	70
36	上記クラスに含まれない工業製品	39
美術部門		*
37	建築	
38	油彩・水彩・素描	
39	彫刻・塑像・型彫り・沈み彫り	
40	エッチング・版木	

* 美術部門は公式カタログに出品者数情報なし
 (出典) *Illustrated Catalogue*

方法が想定されていたのである。しかしこれは外国からの出品の情報が事前に十分に届かなかったもので、外国については国別に会場を割り振らざるを得なかった。しかしながら委員は当初の方針を少しでも貫徹させるために、国別のスペース内では上記クラス分類に従った配置とするよう要請した（じっさい、出品者の多い国々を中心にこの原則に則る国がほとんどで、出品者のカタログもこの基準で作成されている）。また稼働機械、農業機械展示等特定の分野については、国籍の区別なく独立したスペースが設定されていた。²⁰⁾

4.2 特徴的な展示品について

前述したように、前回からの進捗状況を示すことが主要な目的であったため展示品は1851年以降につくられたものであることが条件とされたが、実質的にはこの要求を徹底することはできなかった。もちろん多くの新しい機械や製品等が展示されて、それらは1850年代に実現した、あるいは源を発する技術革新や新機軸の状況を反映するものであった。以下、公式カタログからの情報等を典拠としてクラス別に主要な展示品をいくつかピックアップしてみてもよいが、そのような新たな動向を示すものを中心に上げてみたい。あらかじめお断りしておくと、公式カタログは1851年のカタログと比べると展示品の図版と情報量が圧倒的に少なく（そのこと自体がすでに当時でも批判対象となっていた）、不確かな情報に頼らざるを得ない部分が少なくない。

最初の素材・原材料部門は、一般見物客よりも関係する業者の関心が強かったと思われる。4つのクラスからなるこの部門のうち、注目される展示品をひとつだけあげておこう。それは化学品企業 R. Rumney (Manchester) が出品したコールタール染料である。化学染料の合成には1850年代なかばに英人パーキン (W. Perkin) が成功したばかりであるが、同社は従来のアカネやコケ類からの天然染料と並んでこの新しい人工染料を展示した。

つぎに機械部門に目を向けてみよう。入場した観客たちにとって1851年博との大きな違いと意識させたのは、ひとつは芸術絵画を含む美術部門の存在と、機械部門の展示品の大型化であった。前回では会場で展示できる機械重量の上限が7トンだったが、今回はおそらく輸送手段の進化も反映して35トンまで可能となった。²¹⁾ 機械部門の場合はとくに1851年博から10年間の長足の技術進歩を反映するかたちで、高性能化・大型化が顕著に現われている。鉄道用機材がクラス5として独立したのも特徴であるが、前回高速機関車として出品されたロンドン・ノース・ウェスタン鉄道の、大型の動輪一輪を備えた“Cornwall Express”に比較して、今回は動輪3輪の新鋭機関車がミッドランド鉄道より出品されている。クラス7の工作機械も技術的に著しい進歩をみせている。多数の機械を出品した Whitworth 社は、すでに1850年代に従業員600人を超える工作機械・兵器製造企業であった。1851年博でも23点出品したが、今回は全工作機械の四分の一を同社製品が占めるにいたった。Whitworth は中剝機

を発明したモーズレー（W. Maudslay）門下三羽鳥のひとり（あとは R. Roberts, J. Nasmyth）。のちに同じ武器製造のアームストロング社と合併し、その後ヴィッカーズ社となった企業である。繊維加工の機械類としては、1851年博ではオールダムのプラット社（Platt, Brothers, & Co.）が綿加工機械一式を稼働展示して話題をさらったが、今回も同様の展示を行ない、とくに紡績工程には最大648錘の自動ミュール機が含まれていた。

同クラスのマシンは1851年博には出品されなかった新製品といえよう。家庭用機器としてはクラス8の洗濯機も機能と操作性を高めた出品となっている。クラス9の農業機械類は引き続き多くの出品があったが、全体的に動力としての蒸気機関の導入がさらに進展していた。1862年博の顕著な特徴のひとつは、武器および軍事関係の展示にクラス11, 12の二つがあてられたことであろう。1851年博には、軍事関係の展示は独立したクラスになっておらず、展示品も少なかった。よく知られているように、クリミア戦争で大砲の命中精度が低かったことが問題視され、素材とメカニズムの両面で大砲の改良が進んだ。ロンドンの T. W. Blakely は500ポンドの大砲を出品し、軍納入業者による共同展示として小火器を積み上げ展示した武器トロフィーが大きな注目を集めた。またクラス14の写真機類も独立してこの分野の技術革新を示し、同じく独立したクラス16の楽器類では、ベルギーのサクソ（Adolphe Sax）が1840年代に特許を取得した新しい楽器が展示されていた。

出品者数・展示品数とも最多であったのが工業製品部門であるが、そのなかでもとくに出品者が多かったのがクラス31の鉄および金属製品全般であった。最少だったクラス22のカーペット（出品者43）にたいし、このクラスは400を上回っていた（100以上の出品希望者が拒絶された）。出品者（業者）の所在地は、バーミンガム、シェフィールド、ウォルヴァーハンプトンを合わせると大半を占めていた。またクラス32の鋼鉄・刃物類もそれらの諸都市からの出品が多いが、注目されるのはヘンリー・ベッセマーの Bessemer & Longsdon 社がシェフィールドのベッセマー工場加工した鋼製品を出品していることである。いうまでもなくベッセマーは鋼鉄の安価な大量生産法の発明で19世紀半ばに特許を取得したばかりだったが、その動機のひとつとして、やはりクリミア戦争での武器の素材的弱点の解消が頭にあった。もうひとつ1862年博で新しく分類されたクラス36には、旅行カバンが出品されている。これも鉄道網や外洋定期航路の拡大を背景とした出品といえよう。

植民地および諸外国からの出品は前回よりも比重が高まり、より “International Exhibition” の名にふさわしいものとなった。しかし個々の展示品にかんする情報はむしろ乏しくなり、そこからわかることは限られてくる。植民地のインドは、1851年博の時には東インド会社が展示品選定の窓口となり、すべて同社からの出品という扱いだったが、50年代に同社が解散となったため、今回は万博インド部門責任者が全体の出品をプロデュースしている。展示品は整然とクラス分類され、品数も植民地の中ではとびぬけて多いが、たとえばこの時

期中国へ向けた輸出が急増しつつあったアヘンの原料であるポピーの種子や皮膜などが目を引く。また合衆国の南北戦争による「綿花飢饉」の時期であったことを反映して、インド産綿への関心が高まっており、展示スペースも拡大された。²²⁾

参加国数も前回から増えているが、やはり出品者数と展示スペースで他を圧倒しているのはフランスであろう。ロケーションを考えれば、四千余という出品者数は、六千余のイギリスと拮抗する勢いということもできる。とくに最盛期にあった絹製品関係の出品者は、リヨンを中心に100をはるかに超えており、60余りのイギリスにはっきりと差をつけている。すでに1851年博でもフランスの美的で効果的な展示の方法は指摘されていたが、1855年のパリ万博開催の実績を生かしていっそう充実した展示に結びつけた。また1860年に英仏通称条約が締結されたばかりであり、この二国が経済的に蜜月の関係にあったこともその背景であろう。

一方で前回には高性能の刈取機や標準化された部品を使った回転銃などでイギリスの見物客を驚かせたアメリカは、南北戦争勃発直後ということもあり、ごく限られた出品となっている。またこの時点ではドイツ連邦の国々は関税同盟諸国として別個に出品しているが、イタリアはローマ市をのぞき統一出品であった。

5 お わ り に

以上、1862年博について、その概要と背景を中心に見てきた。1851年博が「世界の工場」として頂点にあったイギリスの工業生産力を誇示する記念碑的催しであったとすれば、1862年博も1850年代から1860年代に入る時期の世界情勢の変化や産業の動向、新たな技術革新やその普及の実態を如実に示す、画期的な催しであった。それは展示された機械類の性能向上や大型化、また19世紀後半の新たな業種の躍進につながるような革新的技術や素材の提示などにも現われている。1951年（1851年博百周年にあたる）にいくつかの書物が刊行されており、それらはもはや万博研究の「古典」といっても良いが、そのひとつでラックハーストは、1862年博がしばしば言われるようなまったくの失敗だったわけではないと指摘している。すなわち、さまざまな「逆境」のなかで入場者数は前回を（かろうじて、ではあるが）上回っていた。また財務運営は綱渡りの状況が続いたが寛大な寄付の申し入れもあり、なんとか収支をほぼ均衡させることができた。余剰金こそ残さなかったが、しかし大赤字の万博が決して珍しくなかったことを考えれば、これは「上出来」ではないかと。さらに、1862年博では、クラス分類の原則は前回よりも厳密に適用され（全展示品に徹底することはできなかったが）、外国勢の参加も顕著に増えている。なきアルバート公が想定していたような科学と知識の啓蒙の場としての万博、また「現在の到達点を総括し、未来の方向性を決める出発点」としての万博という役割については、1851年博よりもこの大会のほうがよりいっそう本質的

に体现していたとみることもできる。²³⁾

とはいえ、大会の主催者および関係者にとっては、閉会後の展開は冷酷なものとなった。工芸振興協会の当初の構想は、爾後十年ごとにロンドンで万博を開催し、そのための資金として今回の剰余金を当て、会場も同じ建物を使用することであった。ふたを開けてみれば剰余金はまったく計上されず、(ラックハーストでさえ「救いようもなく凡庸」と評した)²⁴⁾会場建物は直ちに取り壊されることになった。たしかに最先端の技術情報を発信する場としての万国博をあらためて開催することは1860年代においてもイギリスの責務であり、第二回の万博が構想されていた経緯は自然なものであった。他方で、この大会で新しい産業技術として展示された鋼鉄大量生産のメカニズムや化学(人工)染料の合成は、やがてヨーロッパ大陸やアメリカでいっそうの開発が進み、いわゆる第二次産業革命の技術革新を支えることになった。それに呼応するかのように万国博の主役もこれらの国々に移り、イギリスではこの1862年博を最後に、本来の意味での万国博覧会はこんにちにいたるまで開催されていない。

前述のように、1862年博の開催準備中は(本来の開催予定年であった1861年を基準として)10年に一度の頻度で万博を開催する予定が立てられていた。ところが実際にこれを実現したのは1855年パリ万博以降、1900年の催しにいたるまでほぼ11年に一度の頻度で盛大な万博を開催したフランスであった。たしかに当初の予定にある程度沿ったかたちで1871年に同じサウス・ケンジントンを会場として「国際博覧会」が開かれてはいるが(しかも数年にわたり連続開催された)、展示各分野の専門性をより深めるという趣旨にもかかわらず、入場者も少なく、国際的な催しとしてはほとんど注目されていない。グリーンハルジュは、不入りだったサウス・ケンジントンでの催しに象徴されるように、万博の組織者たちは博覧会がけってフェア(見世物市、お祭り)やショーであってはならないという信念からフランスやアメリカでの催しのようなエンターテインメントを意識して避けようとした。その結果、万博の成功の秘訣が学びと見世物との適度の融合にあるということを、イギリスは20世紀明けまで学ぶことができなかったとみて²⁵⁾いる。1862年博でますますはっきりと打ち出された「科学と知識の啓蒙の場」という方針の徹底は、皮肉にもそのような場とチャンスを狭めることにつながったと言えるかもしれない。

その後、イギリスでは19世紀末から第二次世界大戦まで、大英帝国博覧会ないし植民地・インド博覧会が数回、また英仏博覧会(1908年)、日英博覧会(1910年)などが開催されているが、これらはいうまでもなく「万国」博覧会の趣旨にかなうものではない。ただし、水晶宮での催しから百周年にあたる1951年の万博開催については、第二次世界大戦中からイギリスは計画を立案してパリの国際博覧会協会(BIE)との交渉も進めていたが、これも諸般の事情で叶わず、結局は大きな規模ではあったが国内行事にとどまったイギリス祭(Festival of Britain)²⁶⁾として結実した。なぜ、イギリスにとって1862年博が「最後の万博」となったの

か、今後も多面的に追跡してゆきたい。

注

- 1) 重富 (2011)
- 2) ドバイ万博公式サイト
- 3) 佐野 (2020)
- 4) 松村 (2008)
- 5) Greenhalgh (1988), p. 31
- 6) Hoffenberg (2001), p. xiii
- 7) Greenhalgh (1988), p. 19
- 8) Hoffenberg (2001), pp. 6-7
- 9) *Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor* (1862), p. 7
- 10) Greenhalgh (1988), pp. 153-154
- 11) 重富 (2012), 42頁
- 12) Hoffenberg (2001), pp. 65, 183, 211-212
- 13) *Illustrated Catalogue*, vol. I, chap. IX-X; なお直近のマンチェスター美術博については松村 (2014), part 3 が詳しい。また1862年博美術部門については同書 part 4。
- 14) Luckhurst (1951), p. 130
- 15) *Illustrated Catalogue*, vol. I, pp. 50-55
- 16) Mallett (1863), p. 588
- 17) 市川 (2015)
- 18) 佐野 (2020), 9 頁
- 19) 重富 (2011), 52頁
- 20) Hobhouse (2002), p. 133
- 21) Hobhouse (2002), p. 136
- 22) Hoffenberg (2001), p. 112
- 23) Luckhurst (1951), pp. 130-131
- 24) Luckhurst (1951), p. 131
- 25) Greenhalgh (1988), pp. 31-33
- 26) この経緯については佐野 (2020), 21ページを参照

参 照 文 献

公式カタログ等

Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor; The International Exhibition of 1862 (Cassell, Petter, & Galpin, 1862).

The Illustrated Catalogue of the International Exhibition of 1862, London, Printed for Her Majesty's Commissioners, 4 vols. (Eureka Press, reprint, 2014). 脚注では *Illustrated Catalogue* と略記
Lectures of the Results of the Great Exhibition of 1851. Delivered before the Society of Arts Manufactures

and Commerce, at the Suggestion of Prince Albert (London: David Bogue, 1852).
 Mallet, R. (1862), *The Record of the International Exhibition, 1862* (Glasgow: William Mackenzie).
Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, 3 vols. (London: Spicer Brothers, 1851).

一般文献等

Auerbach, J.A. & P.H. Hoffenberg (eds., 2008), *Britain, the Empire, and the World at the Great Exhibition of 1851* (Aldershot: Ashgate).
 Greenhalgh, P. (1988), *Ephemeral Vistas: The Expositions Universelles, Great Expositions and World's Fairs, 1851-1939* (Manchester U. P.).
 Hobhouse, H. (2002), *The Crystal Palace and the Great Exhibition: Art, Science and Productive Industry: A History of the Royal Commission for the Exhibition of 1851* (London: Athlone Press).
 Hoffenberg, P.H. (2001), *An Empire on Display: English, Indian, and Australian Exhibitions from the Crystal Palace to the Great War* (Berkeley: Univ. of California Press).
 Luckhurst, K. W. (1951), *The Story of Exhibitions* (London: The Studio Publications).
 May, T. (2010), *Great Exhibitions* (Oxford: Shire Publications).
 市川文彦 (2015) 「近代パリ万国博の軌跡 1855～1900：その〈万有理念〉が顕すもの」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』(思文閣出版), 533-560頁。
 佐野真由子 (2020) 「序説・万国博覧会という, 世界を把握する方法」佐野真由子編『万博学：万国博覧会という, 世界を把握する方法』(思文閣出版), 3-43頁。
 重富公生 (2011) 『産業のパクス・ブリタニカ：1851年ロンドン万国博覧会の世界（コスモス）』（勁草書房）。
 重富公生 (2012) 「1851年ロンドン万国博覧会と労働者」『国民経済雑誌』第206巻第5号, 33-47頁。
 松村昌家 (2008) 『幕末維新使節団のイギリス往還記：ヴィクトリアン・インパクト』（柏書房）。
 松村昌家 (2014) 『大英帝国博覧会の歴史：ロンドン・マンチェスター二都物語』（ミネルヴァ書房）。

ドバイ万博公式サイト (<https://www.expo2020dubai.com/>) (2021年10月27日アクセス)